

シンポジウム

「安全性からみた鍼灸治療の現状と可能性」

山下 仁

森ノ宮医療大学 保健医療学部鍼灸学科 教授

医療において治療の選択肢となるには、利益とリスクのバランスに関するデータが必要である。鍼灸の有効性が EBM の概念に則って検証されるようになった後も、近年まで有害事象の症例報告論文にもとづいて鍼灸の安全性が論じられることが多かった。しかし、1990 年代後半から国内外において有害事象の前向き調査が実施され、標準的な鍼灸施術による深刻な有害事象はまれであるというエビデンスが提示されるようになった。そのデータを紹介する。

「麻酔科領域における鍼灸治療の現状と可能性」

榎田 高士

関西医療大学 保健医療学部 鍼灸学科・大学院 教授

近畿大学医学部麻酔科 非常勤講師

近畿大学医学部附属病院麻酔科ペインクリニックにおける鍼灸治療について現状を紹介し、問題点と今後の方向性について述べる。ペインクリニックにおける適応疾患は鍼灸治療の適応と重なることが多い。鍼灸治療は主にブロックが効を奏さない痛み、自律神経が関与する痛み、不定型の痛み、耳鳴・難聴や難治性の麻痺などの症例に対して行っているが、法的な制約、また人的、時間的な制約から限られた症例について行っているのが現状である。現代医療において治療が難渋する疼痛疾患に対して神経ブロックと鍼灸治療との併用を行うことで有効率が高まるとも考えられるが、ペインクリニック領域で鍼灸が有用な治療法として確立するためには麻酔医の理解とさらなるエビデンスの集積が必要である。

「緩和医療における鍼灸治療の現状と可能性ーがん治療に伴う副作用を中心にー」

福田 文彦

明治国際医療大学 臨床鍼灸学教室 准教授

大阪大学医学系研究科 生体機能補完医学講座 特任研究員

がん患者に対する鍼灸治療は、補完医療として体調管理・副作用軽減・症状緩和・緩和ケアなどに適応があるとされている。化学療法は、がんの集学的治療の1つであるが、薬剤の容量に応じて有害事象(副作用)を生じる。とりわけ、末梢神経障害に対しては現行の治療で有効なものはなく、患者のQOLを著しく低下させ、休薬を余儀なくされる。そこで我々は、この末梢神経障害に対して鍼灸治療の安全性及び効果を検討し、その効果と安全性を認めている。がん治療に伴う副作用を鍼灸治療により軽減することができれば、患者のQOLが高まるとともに必要な治療を継続することも可能になる。このことから、鍼灸治療はがん患者の副作用の軽減に対して補完医療の視点から有効な治療方法であると考えられる。

「高齢者医療における鍼灸治療の現状と可能性」

安野富美子

東京有明医療大学 保健医療学部鍼灸学科 教授

老年期では、心身の状態は成人期とは多くの点で異なる。また、高齢者は一人で多くの疾患を持ち、慢性のものが多く、治癒し難く、高齢者医療においては、現代医学のみでは、対処できないことも多い。鍼灸医学は、養生医学と治療医学の二重構造である。前者の目的は、生体の恒常性や生体防御を増強し、健康維持増進を図り、疾病予防を図ることである。後者は疾病や症状の改善を図り、QOLを向上させるところにある。しかもその視点は常に全人的であり、高齢者の健康寿命を伸延する上で、またQOLの向上を図るうえでも適した医学であり、老年医療の分野では、その有用性が期待される。本シンポジウムでは、これまでに我々が高齢者疾患に行ってきた鍼灸治療を中心に高齢者医療における鍼灸治療の現状と可能性について述べる。

—総括—

「統合医療における鍼灸治療の可能性」

統合医療には今も二つの考え方があり統一されていないと感じている。ひとつは現代医療の中にエビデンスの強い補完代替医療の手段を組み込むという考え方、もうひとつは補完代替医療の視点を取り入れて現代医療における医科学的思考そのものを変えてしまうという考え方である。鍼灸はいずれの考え方においても貢献できるが、パラダイムの変換を伴う後者のほうを最終目的とすることが本来的な統合医療の実現ではないかと考えている。